

直言

この十一月中旬から下旬まで、ソ連と中国を訪れた。モスクワから北京へは直航便で飛んだのだが、深夜のフライトなのに、アエロフロートの機中は訪中するソ連人でいっぱいだった。中国から帰りの上海―成田間の日航機がガラ空きだったことと対照的だった。ソ連人は技術者たちらしく、これから北京へ行くという彼らのはしゃぎぶりともども、まるで一九五〇年代の中ソ友好時代が蘇ってきたかのような雰囲気漂っていた。

北京は依然として戒厳令下にあるだけに、天安门広場とその周辺には、まだ緊張感が残っている。腰のピストルを目立たせた人民武装警察部隊があちこちを警備しており、しかも教練のようなデモンストレーションを隊列を組んでしきりにやっていた。

こうした状況下で中国側は、当面の引き締め経済への先行き不安と観光収入の激減によ

る手持ち外貨の不足もあつて、西側諸国との経済関係の再開を強く望んでいるけれど、思うにまかせないようだ。北京のアメリカ大使館前には、ナンバードプレートをはずした中国公安当局の車が三台停まつていて、朝から晩まで、大使館に保護を求めた方励之夫妻の動静を見張っている。これではアメリカ側も不愉快だろう。

それだけに中国は日本に期待している半面、日本が第三次円借款の凍結を解いていないことに苛立ち、鄧小平氏は去る十一月上旬、訪中した日中経済協会代表団を「恫喝」したという。第三次円借款は二・五%の超低利であり、中国としては是非ともほしい資金であるが、五年間で八千億円だから年間十二



東京外国語大学教授  
中嶋 嶺雄

億米ドル前後の金額である。この程度の資金にあれば一日も早く戒厳令を解除すべきであり、それが出来ないのなら、中国の首脳が訪日して日本側に説明し、釈明すべきであろう。それなのに去る九月中旬には、自民党の伊

東正義氏らの日中友好議連訪中団は、その日のうちに飛行機を乗りついで休暇中の李鵬首相に会うため、わざわざ瀋陽まで出かけて行った。本来なら、わが国の長老政治家を迎えるために、李鵬首相は北京まで帰ってくるべきであろう。これではまさに「朝貢外交」そのものだといわざるを得ないではないか。中国側がこのような態度をとりつづけるかぎり、中国の現代化に未来はないであろうし、日本側がそれに迎合しているかぎり、日中関係に真の友好はないだろう。

中国首脳が来るべきだ